

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号： 14101
 研究種目： 基盤研究 (C)
 研究期間： 2008 ～ 2012
 課題番号： 20520160
 研究課題名 (和文) 丹羽文雄記念室および田村泰次郎文庫の総合的調査
 研究課題名 (英文) The totally study about the memorial room of Fumio NIWA and the library
 Taijiro TAMURA
 研究代表者
 尾西 康充 (ONISHI YASUMITSU)
 三重大学・人文学部・教授
 研究者番号： 70274032

研究成果の概要 (和文)：

四日市市立図書館には、平成 17 年に逝去した丹羽文雄に関する資料がある。孫・丹羽多聞氏から寄贈されたもので、平成 19 年に丹羽文雄記念室が設けられた。丹羽文雄記念室には自筆原稿をはじめとして浄土真宗関係の蔵書などが所蔵されている。他方、三重県立図書館には作家田村泰次郎に関する資料が 9,000 点保存されている。これらは田村泰次郎が亡くなった後、平成 5 年に妻・美好氏から三重県立図書館に寄贈されたものである。本研究は丹羽文雄記念室および田村泰次郎文庫に所蔵されている資料類を整理、解読、活字化する基礎的作業をふまえ、丹羽文雄および田村泰次郎の文学史的・文化史的意義を明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：

There are historical materials about Fumio Niwa who died in Heisei 17 in the Yokkaichi city library. It was presented by a grandchild - Tamon Niwa, and the Fumio Niwa memorial room was opened in Heisei 19. Collection of books Jodo Shinshu-related [including the manuscript in one's own hand] etc. are possessed by the Fumio Niwa commemoration room.

On the other hand, 9,000 data about writer Taijiro Tamura are saved in Mie Prefectural Library. After Taijiro Tamura passes away, it will be presented to these from a wife and Ms. Miyoshi in Mie Prefectural Library in Heisei 5.

This research clarified history of literature cultural history meaning of Fumio Niwa and Taijiro Tamura based on arrangement, a decipherment, and the printing-type-ized fundamental work for the data possessed by the Fumio Niwa commemoration room and the Taijiro Tamura library.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近・現代文学

1. 研究開始当初の背景

丹羽文雄は膨大な量の作品を遺したことで知られている。戦前は「贅肉」の“生母もの”や「海面」の“マダムもの”という愛欲の世界を鋭く描いた作品を発表して注目され、いち早く流行作家となる。戦中は海軍報道班員として「還らぬ中隊」「海戦」などの“戦記もの”を発表する。戦後は、再び愛欲を中心とした「鬼子母神界限」などの風俗小説を多く発表した。中村光夫との〈風俗小説論争〉以後、「幸福への距離」などの“実験小説”を試みるようになった。老人介護という現代的問題を含んだ「厭がらせの年齢」は、読者を驚かせる刺激的な作品であった。「青麦」で父親を書き、僧侶としての父親の存在を考えると宗教を考えるようになった。そして親鸞の思想をテーマとした“宗教小説”（「親鸞」「蓮如」）へ進んだ。長い作家活動のなかで、丹羽文雄はいろいろな系列の作品を書き、どの時代においても読者の注目を集めるような話題作を発表していた。それら系列の相互の関係、発展の経緯など、いずれもまだ研究はなされていないのだが、丹羽文雄記念室に所蔵されている資料を分析すれば、それらは明らかになると考えられる。とりわけ晩年の宗教作品は、丹羽文雄の生家が四日市市内の浄土真宗寺院であっただけに、丹羽独特の宗教観が含まれており、その分析することは、近代の宗教文学の研究にも一石を投じる。

他方、戦時中に田村泰次郎が配属された独立混成第4旅団独立歩兵第13大隊は、戦局が悪化すると第62師団に編成替えされ、河南作戦の終了後、沖縄に移動した。激しい攻防戦で大隊は甚大な損害を受け約1,200名のうち9割以上が戦死した。大学を卒業した者は士官待遇が普通であったが、30歳を目前にしていた彼は早期の除隊を希望して一兵士の身分で応召した。しかし戦局は予想を越えて悪化しており、「百団大戦」と呼ばれる中国共産党軍（八路軍）の大規模な反攻によって旅団は壊滅的な打撃を受けていた。泰次郎の戦争小説のなかに「討伐」「燼滅」という言葉が頻出するが、百団大戦以後、軍民一体となった八路軍に脅威を感じ、旅団は抗日根拠地に対して大規模な「掃蕩」「清剿」作戦を実施した。一般住民に対する虐殺をともし、軍の所業は、今も現地の人々に語り継がれている。拙稿「田村泰次郎への旅」（「人文論叢」第23号、三重大学人文学部文化学科研究紀要、平成18・3）は、山西省陽泉での現地調査にもとづいて執筆したものである。人心の掌握が先決と考えた旅団司令部の命令に従って、泰次郎は司令部附の宣撫班に転属する。山西省陽泉の市街で八路軍捕虜と起居を共にし、軍への協力を呼びかける和平劇団

の運営に携わった。このときのエピソードを踏まえて創作された作品が「肉体の悪魔」である。泰次郎は職務柄、多くの住民と接触してさまざまな情報を得ており、「春婦伝」「蝗」に代表されるような慰安婦の姿も、そのような彼ならではの視線で書かれている。

泰次郎が体験したこれらの戦場での記憶は、田村泰次郎文庫に所蔵されている書簡・はがき・草稿類を解説すれば、より理解が深まることになる。

2. 研究の目的

丹羽文雄は長い期間、昭和の文壇で創作活動をおこなってきた。さまざまな系列の作品を発表し、そのたびに読者から注目を浴びる存在であった。それら作品を分析することは、単に近代現代文学史だけではなく、広く近代現代文化史での研究に貢献することにつながる。日記や書簡からは、作家や文化人との多彩な交流が明らかになり、いつどこでだからどのような影響を受けたのかが分かる。

また自筆原稿からは創作のプロセスが明らかになり、速筆多文といわれた作家の創作手法が分かる。他方、戦後の肉体文学によって田村泰次郎の名前は一般読者に広く知られるようになったが、田村泰次郎における戦後を知るためには、戦前・戦中からの流れを知る必要があり、この意味において田村泰次郎文庫の資料研究は貴重な情報を提供してくれる。とりわけ書簡や草稿類は、既発表の資料とはちがった側面を見せてくれる。それらからは井上友一郎や坂口安吾、矢田津世子、北原武夫、高見順や本庄陸男、荒木巍、新田潤、円地文子、田宮寅彦、渋川驍、立野信之、井上友一郎、石光葆、金子光晴たちとの交友が分かる。「読書人」第2587号（平成17・5・20）に掲載された鼎談（紅野謙介および米田佐代子、尾西）は田村泰次郎の文学が現在おかれた位置を的確にとらえている。田村泰次郎の作品は戦後という時代背景に分ちがたく結びついて描かれたものであり、大戦の戦火をくぐり終えた世界のシンクロニズムから読み解くことが必要であろう。アプレゲールの風潮は、大戦を経験した国々で、思想を超えた場所に自己存在の意義を説く実存主義をもたらした。本研究は、田村泰次郎文庫の資料の分析と中国山西省における現地調査をまじえながら戦争や肉体に関わる言説を批判的に考察する。

3. 研究の方法

丹羽文雄記念室および田村泰次郎文庫に所蔵されている書簡・はがき・草稿類を解説する。そのうえで、作品の創作動機やテーマ

に繋がっている資料を選び出し、資料と作品とを結びつけながら分析を加えた。

さらに丹羽文雄と田村次郎の伝記的年譜を作成し、それぞれの時代背景を関連付けながら、創作の深化を追跡した。

4. 研究成果

丹羽文雄にとって自己は「刻々変化する印象」であるとし、自我には実体がなく、移ろいゆく影のようなものであるとする。いかにも無責任のように聞こえるが、ここには時代に翻弄された作家の感慨とともに、他力本願を信じた丹羽の本質が表現されていると考えられる。

「還らぬ中隊」の「酒井」が戦陣日記には書かれていない事実を伝えようとし、「海戦」の「私」が長官訓示の粗末さに海軍の伝説とは違う「何か割り切れないもの」を感じ、「篠竹」の「新門」が「過大評価」されていた特攻隊の本当の姿を明らかにしようとしたように、丹羽は従軍作家としてみずから体験した〈実感〉にもとづいて戦争の本質に触れるきっかけを掴んだ。しかし厳しい言論統制のなかで、つねに検閲の対象になっていたとはいえ、どの作品もゴシップに好奇心を抱く大衆の欲望を満たすレベルの描写にとどまってしまったのは、自我を移ろいゆく影のようなものとする丹羽には、視点のあり方を自己言及的に問い直す発想を持たなかったからであろう。

丹羽が文壇に認められたのは昭和九年七月、総合誌「中央公論」が組んだ特集「新人号」に島木健作の小説「盲目」とともに丹羽の「贅肉」が掲載され、〈新進作家〉として将来を嘱望されたことだった。その前年の昭和八年二月には小林多喜二が築地警察署で拷問死し、六月には日本共産党中央委員の佐野学と鍋山貞親が獄中から転向声明を発表するという〈転向の季節〉に重なっていたことは、主体の根拠をあえて問わないという、その後の丹羽の作家的生涯を大きく方向づけていたといえよう。

他方、田村泰次郎は自分の戦場体験にできるだけ忠実な小説を執筆することに努めた。家永三郎は『太平洋戦争 第二版』（一九八六年十一月、岩波書店）の「第九章『大東亜共栄圏』の実態」のなかで泰次郎の小説「裸女のいる隊列」を紹介し、厳寒の太行山脈のなかを慰安婦が裸で行進させられている光景が「事実の描写と見てよい」のは「作者に直接照会して得た回答による」と注記している。泰次郎は自分の従軍体験を忠実に再現しようと努めながら戦場の光景を一層リアルに描くためにデフォルメして小説を創作していた。

成田龍一氏によれば、歴史家の方法は「固

有の体験の固有の記述から出来事の狭義の『事実』を切り取り、束ね、ひとつの歴史像とする作業であり、人々の体験／証言／記憶を集約化することによって『客観化』しようという営み」であるがゆえに「体験者の固有性やそれが当事者にもつ意味の喪失と引き換え」になる一面も生じるといふ。論理の「客観化」というのは、いかなる学問にも要求されるものだが、「体験／証言／記憶」が持つ「固有性」や「意味」へのこだわりは、とりわけ文学の研究領域であり、細部へのこだわりを強めることから新しい解釈が生まれることが多い。戦場の記憶を継承するために歴史学と文学の研究領域を横断して泰次郎の文学を読み深めてゆく作業が必要とされるであろう。泰次郎によれば、実際に戦場を体験した人間が戦争を小説化する場合、自らの体験に忠実であればあるほど、現在の戦争小説に均しく求められているヒューマンイズムとは無縁のものになる。戦争に抵抗する人間を作品に登場させることは、今では「一つの権威ある約束」になっているが、戦場でははみな「一匹の獣」と化し、生き残るためには誰一人として傍観者ではいられなかった。戦争の実相を正確にとらえて人間性の真実を直視するためには、現実の戦場とは合致しない「約束」で成立していた「ヒューマンイズムの壁」を打ち崩し、欺瞞に満ちた「傍観者の文学の域」の外に進み出る必要があるという。このような主張に従って晩年の泰次郎は「厳密な意味での私小説の発想」から原体験を小説化する方法を選び取り、戦場で振われた暴力の諸相を当事者としての立場から忠実に表現しようと試み続けた。それは作家がヒューマンイズムの薄い表皮を剥がして自己の肉体を露わにし、そこに刻印された加害の過去を凝視することを通じて、作家にとってオブセッションと化した原体験を呼び覚まし戦争の記憶を正しく再構成したのである。胸奥に封印されていた過去を凝視する作業を続ける限り、作家の日常に安息が訪れる時はなかったであろう。このような意味での泰次郎の肉体文学には、戦後六〇年が経ち、かつての戦争に対して第三者的な客観性の立場にあると誰もが錯誤している日本社会の現状を撃つための強かな力が存しているのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①尾西康充、「戦場の記憶を継承するために――田村泰次郎「ある死」「肉体の悪魔」、近

代文学試論、査読有、47号、2009、31-41

〔図書〕（計1件）

尾西康充，他、和泉書院、『丹羽文雄文藝事典』、2013、37-47 全247

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾西 康充 (ONISHI YASUMITSU)

三重大学・人文学部・教授

研究者番号： 70274032